

## 松山の風土と俳句

## 池内 恵吾

Keigo Ikenuchi



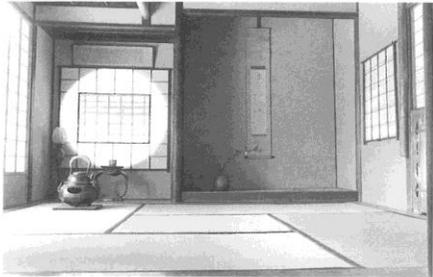
石手寺の「花入塚」。明和7年（1770）建立。表に「祭芭蕉翁塚」、裏に「宇知与利氏波奈以礼佐久辰牟津波几」と万葉仮名で芭蕉の発句が刻まれている。

松山は「俳都」あるいは「俳句のメッカ」などと呼ばれる。近代俳句は、松山に生まれた正岡子規が俳諧の連歌から取り出した発句を、独立した文学すなわち「俳句」としてとらえ直したところから出発した。

しかし、正岡子規は突然変異で生まれたのではない。数世紀以前の中世から、明治の子規を生む松山の風土は醸成されていたのだ。

伊予俳諧の源流は、大山祇神社に残る『法楽連歌』だといわれる。松山の湯築城主河野一門によって十五世紀なかばに始まり、江戸時代までじつに二百年以上にわたって奉納され続けた連歌は、現存するもの二十七十余帖。武家、社家、時宗僧などのほか、後期には庶民や女性も作者として登場する。寛永十二年（一六三五）から明

栗田樗堂の別宅「庚申庵」。いまも松山市味酒町にあり、寛政12年（1800）建築当時の面影を伝えている。（写真提供 渡部章正）



「ほととぎす」創刊の地の記念碑。俳誌「ほととぎす」（現在は「ホトトギス」）は明治30年1月、当時の松山市立花町のこの地にあった柳原極堂宅を発行所に誕生した。

治維新まで松山十五万石を領した松平（久松）家は、代々の藩主が俳諧好きであり、藩士や商人にも俳句が多かった。初代定行の転封に従って桑名から移住した御用商人秦一景は、全国の俳書に三百句以上の作品が掲載され、貞門の俳人として広く知られていた。一景

は、定直まで四代の藩主に風雅の友として仕え、松山を中心とした伊予に貞門俳諧を流布させた。四代藩主松平定直（一六六〇～一七二〇）は、藩の重職久松肅山

や江戸詰め藩医青地彫菜とともに芭蕉の高弟其角に学び、松山に蕉風俳諧を盛んにした功労者である。元禄五年（一六九二）冬、彫業が芭蕉・其角を自邸に招いて巻いた花仙（三十六句の連句）は、打よりて花人探れ梅つばき

の発句で始まり、「梅探る」を冬の季題と定めた記念すべき作。のちに石手寺に建立された「花入塚」は、長く芭蕉を敬慕する松山の俳人たちの心のよりどころとな

った。

同じ元禄期の松山藩士佐竹淡斎は、蕉門の広瀬惟然に師事。芭蕉の句や俳論を記録した「其木がらし」などの俳書を残した。

芭蕉五十回忌の寛保三年（一七四三）、全国十箇所松山に蕉風復興を願う芭蕉句碑が建てられた。うち二基が、芭蕉が足跡を残していない松山藩領にあることは注目している。竹翁は太山寺に「柳塚」を、小倉志山は久方の大宝寺に「霜夜塚」を建てた。

子規が近世伊予第一の俳人と称揚した栗田樗堂（一七四九～一八一四）は、松山の町方大年寄をつとめた大商人。天明俳諧中興の士といわれた加藤暁台門で、井上士朗と並ぶ存在として全国に名を知られる。江戸、尾張、上方の多くの俳人と交流し、伊予俳壇に強い影響を与えた。『樗堂発句集』をはじめ紀行「爪じりし」など多数の著作がある。小林一茶は樗堂を頼って二度来遊している。

ほぼ同時代の百濟魚文も松山の豪商。二六庵竹阿に師事し、一茶とは同門である。かつて久松肅山



松山城ふもとの東雲公園にある中村草田男の句碑  
 「夕桜城の石崖相瀾る」  
 松山城の桜を詠んだもの。昭和五十八年八月五日、  
 草田男は、この句碑の除幕式が予定されていた前  
 日に亡くなった。



石田波郷生家に近い松山市立垣生  
 小学校の波郷句碑  
 「秋いくとせ石鐘を見ず母を見ず」

波郷は、松山の五十崎古郷に学んだのち上京。「ホトトギス」を去つて「馬酔木」に拠る水原秋桜子に師事し、のちに「鶴」を創刊する。草田男は、東大俳句会で虚子に師事し花鳥諷詠の世界に育つたが、より深い文学性と俳句性を求めて戦後「萬緑」を創刊した。子規、虚子、草田男、波郷。いずれも松山を去つて東京で文学活

動をおこなつた。二十一世紀は、IT化など情報革命の時代といわれる。俳句の世界でも、最近はそのそれぞれの風土に根をおろし、日本各地から情報発信する傾向が顕著である。松山にも「糸瓜」の篠崎圭介をはじめ、ふるさとを拠点に全国へ向けた活発な文学活動を展開する俳人が現れている。さらに若い世代を含め、未来の日本の俳壇を担う新しい俳人が、松山の風土の中から誕生することを期待したい。

いけうち・けいこ 元愛媛放送局(株)取締役。現在(株)パーム・クリエイティブ顧問。俳誌「春耕」同人会長。ここ一年あまり、全国の多数の俳句結社誌に目を遣り機会があり、あらためて松山で発行されている俳句雑誌の水準の高さを認識しました。

が芭蕉・其角・素堂の賛を得た狩野探雪の「正風三尊幅」を所蔵し、一茶が正風の三尊見たり梅の宿一茶の句を寄せたことはよく知られている。幕末から明治にかけての俳人に奥平鶯居、大原其戎らがいる。鶯居は松山藩筆頭家老で三千三百石の本身。天保期の田川鳳朗門で全国に知られ、明治十四年松山で発刊された俳句雑誌「俳諧花の曙」の選者をつとめた。大原其戎(一八二一―一八八九)は三津の御船手大番頭の家生まれ、上洛して桜井梅室に学んだ。芭蕉を深く尊崇し、大可賀に芭蕉句碑「あら株塚」を建てた。明治十三年に創刊した「真砂の志良辺」は、東京の二誌につぐ全国でも三番目に古い月刊俳誌である。明治二十年夏、帰省中の子規は三津に其戎を訪問し、句稿を見てもらつた。その後の子規は三年ほど「真砂の志良辺」に投句をつづけ、其戎を生涯俳句の師と仰いだ。其戎は子規に手ほどきをし、いわ

は江戸の俳諧から明治の近代俳句への橋渡しをした先覚者といえよう。正岡子規は古典作品の分類・評価から研究を始め、とくに芭蕉の発句の文学性に注目する。神格化され偶像崇拜されていた芭蕉を、文学者として再評価。さらに画家としてだけ知られていた蕪村の句の魅力を再発見した。同時に実作でも「写生」などの手法を取り入れながら、多くの仲間とともに近代俳句作品を創り出したのである。子規の生涯の親友夏目漱石が松山中学に赴任し、その下宿に子規が五十余日間同居したことも、松山の俳人たちに大きな影響を与えた。子規の指導のもと明治三十年に柳原極堂が松山で創刊した「ほどとぎす」は、やがて高浜虚子によって東京に移され、日本新聞とならぶ子規の文芸運動のメディアとなる。そして子規没後の虚子は、明治、大正、昭和の俳壇に君臨する巨大な存在となつてゆく。現俳壇のほとんどの結社は「ホトトギス」から派生したものと、いつても